

渥美郡三町の時代



郷土史編さん室 ☎36局6503

昭和33年町制施行 当時の赤羽根町の様子

赤羽根村は、昭和33年（1958）11月1日に町制を施行して、人口7348人、戸数1302戸の「赤羽根町」となりました。同年9月11日付「村を町とすることについての申請書」では、町制を施行しようとする理由について次のように記されています。

（原文を基に一部表記を改めた）

「赤羽根村は渥美半島の中央部にあって、太平洋に面する面積二三・七三平方キロメートルの農業

を主体とする豊かな一村であつて、住民は古くから太平洋の荒波にきたえられた根強さを持つており、農業の多角化と機械化によつて経済力は急速に伸張し、村民の文化的生活もまた急速に向上した。

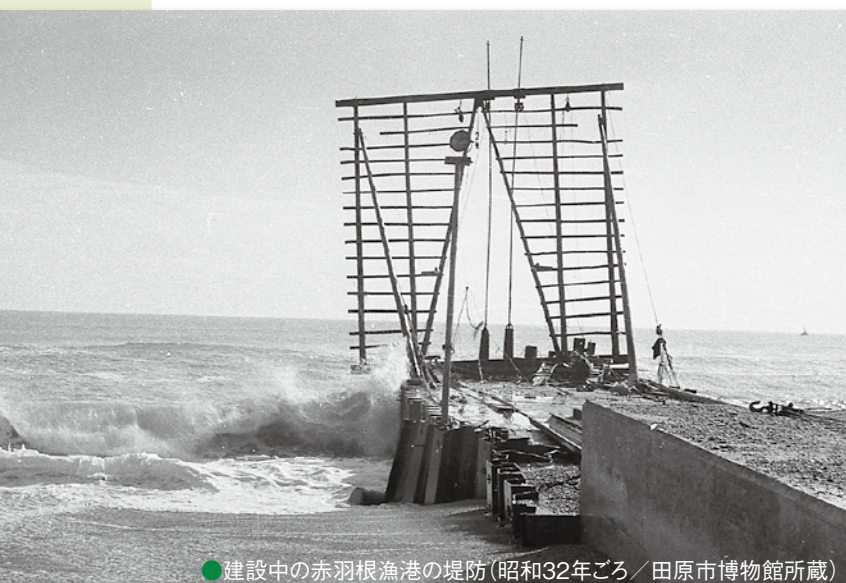
又、交通においても、村の東西を貫く主要県道は近年拡張改修せられて物資の出荷搬入も非常に容易となり、交通量も急増し交通は極めて便利となった。これによって商工業の発達を促し、俸給生活も増加し、都市的業態の戸数は増加の一途をた

どっている。

一面、渥美半島の観光客は近年非常に増加して、大山々麓の原生林や咲き乱れる各種のお花畑の見物客、又、漁港の釣り客等、活況を呈している。

特に農林省の指定による赤羽根漁港は太平洋に三百数十メートルの突堤を築く大工事であるが、これが修築の暁には二、三百トン級の漁船を収容するものであつて、本村の産業は革命的に発展し、人口の増加、商工業の発展が期待され、町としての将来性は大いに期待される。（以下略）

●建設中の赤羽根漁港の堤防（昭和32年ごろ／田原市博物館所蔵）



町は、現在同様に農業が主要産業で、後に豊川用水の通水の一つの契機として日本有数の農業地帯へと発展していくのですが、当時の記録を調べてみると、意外にも農業への期待は二の次とされていました。最も期待されていた事業、それは遠洋漁業基地としての赤羽根漁港の建設計画でした。工事は昭

和28年から始まり、完成時には中型漁船80隻を収容する計画で、金原新町長は当時の新聞で「実現の暁には人口三万人の都市建設を目標」と抱負を述べています。しかし、工事が難航し長期化する間に遠洋漁業が転換期を迎えたこともあり、遠洋漁業基地としての計画は水泡に帰してしまいました。

一方この間、漁師たちの間では漁業に見切りをつけ、農業に転業する人も少なくありませんでした。これにより農業人口が増加したことは、この後、現在へと続く農業王国赤羽根を支える原動力の一つとなつていくこととなります。

（執筆委員・石井一希）

今月の「表紙」

▼「早春賦」の歌詞のとおり、立春を過ぎたとはいえまだまだ寒いこの時期。でも、太陽の光を浴び、一帯を黄色く染める景色を眺めるだけで、春の息吹を感じることができそうですよね。「2015渥美半島菜の花まつり」も3月末まで開催していますので、郷土の「春」を感じてみてはいかがでしょう。（H）

【表紙の写真】満開の菜の花畑（加治町）